

新型コロナウイルス（COVID-19）パンデミックのインパクトと

これからの社会

姉崎洋一

はじめに

コロナ禍の社会は、9. 11や3. 11が与えた衝撃と同じく、21世紀の社会が経験していく新たな課題解決が試されていく社会であると言えよう。

それは、グローバル社会における平和構築のありかた、自然と人間社会のありかた（地震・津波・気候変動等）、人類の生き残り科学・学術コミュニティの役割・課題が問われる社会である。

大学の研究と教育も従来型の伝統の墨守や危機管理システムの維持では対応できない課題を抱えていると思われる。

1, 新型コロナウイルス（COVID-19: Coronavirus Disease 2019 の略）のとらえかたをめぐって。

まず、新型コロナ感染のパンデミック的広がりを受け止めを書いておきたい。中国武漢での感染を淵源とする COVID-19 の世界的な感染拡大は、現段階では、感染者は2億人を超え（2億1982万人）、死者は455万人に達してきている*（世界の感染者：219,821,446人 死者：4,553,701人、9月4日現在、ジョンズ・ホプキンス大学、日本、感染者156万2318人、死者1万6342人、9月4日、NHK）

日本では、2021年9月段階では、「第5波」が、押し寄せてきている。その経緯の詳細は省くが、これほどの広がりや、初期段階では、当初中国も、WHOも予測できなかった。そして、欧州、米国、アジア、南米、アフリカなど、全世界での感染、死者は、ワクチン接種が一定数進んでいるが、新型特異株**の広がりとともに減少の気配は見えない。

冷静に考えれば、人類は、これまでに、幾多の疫病の経験を有してきた。今回はその歴史の軸でとらえることの必要性和、新たな問題との2面で把握する必要がある。

（注1）

1) 歴史軸でとらえる

感染症と人類文明の関係は、多くの先行研究が教えるところによれば、六回の歴史画期があったことが知られる。

第一は、農耕・定住・野生動物の家畜化が、狩猟生活時代と異なる感染症の出現（麻疹、天然痘、インフルエンザ、百日咳、）をもたらしたといわれている。さらに、後に形成された帝国の侵攻が（中国、ローマ、モンゴル等）大きな拡大をもたらした。

第二は、中でもモンゴルの世界制覇である。14世紀欧州のペストの大流行は、モンゴルの欧州侵攻がきっかけを作り出した。そして、そのことが、封建的身分制度の崩壊をもたらした。ルネッサンスや近代世界システムの幕開けを築いたといわれている。

第三は、16世紀旧大陸と新大陸の遭遇である。それまでに天然痘の免疫がなかった、新大陸住民は、人口10分の1にまで減少し、アステカ・インカ文明の滅亡をもたらしたことも知られている。

第四は、アフリカやアジアに乗り出した大英帝国やフランス等の帝国主義諸国は、マラリア、黄熱病等の罹患経験がなかったことから、多くの人命を亡くし、それが、植民地医学を生み出した。このことは、帝国主義と植民学、植民地医学の連動を示していることで知られている。遅れて、列強に加わって植民地経営に乗り出した日本も例外ではない。

第五は、第一次大戦時に大流行した、スペイン風邪である。ウイルス疫学の研究は、このときから進展してきたとされている。そして、スペイン風邪は、今回のCOVID-19に近似していることも知られている。

第六は、「人新世 (Anthropocene アントロポセン)」 (***) ノーベル化学賞受賞者のパウル・クルツェンが名付けた「人間たちの活動の痕跡が、表面を覆い尽くした年代」「資本主義が生み出した人工物、つまり負荷や矛盾が地球を覆った時代」「人新世」ではなく、「資本新世」と呼ばれる世界変動とCOVID-19の連関である。これについては、次にもう少し述べたい。

2) 「人新世」時代における新たな災禍 (注2)

第一は、「人新世」による新たな災禍である。ごく最近の事態としては、9.11 (戦争), 3.11 (地震・原発事故) などがあげられる。いずれも、米国や日本、ひいては世界のあり方に甚大な影響を与えた。

そして、COVID-19は、9.11, 3.11に続く、米国に端を発した新自由主義、グローバル社会がもたらした悲劇である。それまで、バラ色で語られてきた物語が色あせて、持続発展可能性の危機 (気候変動、生命の存続) が顕在化してきたのである。しかも、中国で発生したことにより、世界経済が、米国支配の時代が退潮し、いかに中国の生産に影響を受けていたかも可視化された。そして、感染拡大は、欧州、アメリカ、アジア、アフリカを問わず、世界地図上殆どに波及してきた。

第二は、医学疫学上で未知のCOVID-19の特質である。現段階では、治療法、決定的なワクチン (疫学的に有効性のあるワクチンは2021年に急速に接種されてきたが、国によるワクチン格差がある) 開発は、未了である。Covid-19の対策は、国や社会においてまちまちであり、法的規制や社会的合意も未経験なことも多い。

第三は、不都合な真実 (dirty secret) が可視化されてきた。貧富の経済差が生死を分かつこと、医療福祉格差は、とりわけてそうであった。また、中国の生産に依存している世界経済、国家と政治家の力量差が顕在化したこと、科学知識の欠落とフェークの拡散が、各地で見られたこと。エッセンシャルワーカー (care worker, key worker とし

での医師、看護師、学校教師、介護、保育士、等の医療・教育・福祉職)の存在が可視化されたこと。＜①真に必要なこと、②不要不急のもの、③ブルシットジョブ＝どうでも良いことや仕事＞区別が可視化された。また、世界的には、スウェーデンのグretaさんの気候変動へのアクションがより重要度を増してきたこと、COVID-19 感染の広がりによって黒人やマイノリティへの差別が浮き彫りになった。命の平等性を求める世論が喚起されたことも大きい。

第四は、Stay home, Social distance, Save lives (日本では、「三密」キャンペーン)によって、各国の経済活動が一時停止し、人々の移動や物流が極めて抑制されて、生活様式が激変した。それによって、経済活動の再開と感染防止維持のジレンマや矛盾が、吹き出してきた。そして、生活保障の経済支援が、各国の緊急課題となった。また、芸術・心のケアの軽視が社会を蝕むことも明白になった。

第五は、GAFA(Google, Amazon, Facebook, Apple)の比重がより大きなものとなり、収益がコロナ禍で急拡大していることも明らかになった。加えて、オンライン・リモートによる仕事やコミュニケーション、教育業務の増大が世界で共通に見られた。また、同時に、対面とリモートのメリット、デメリットも具体的に顕在化してきた。AIの功罪も、より現実的に論じられるようになってきた。

要するに、新型コロナ感染の拡大の中で、「何を守り、何を捨て、僕らはどう生きていくべきか」(パオロ・ジョルダノ) (注3)が問われてきたのである。しかも、弱者に対して社会が、どれほどに inclusive であるかが問われてきたのである。

あの武漢で、記録をとり、日記を書き続けた作家の言葉が重く突き刺さってきたといえる。「ある国の文明度を測る唯一の基準は、弱者に対して国がどういう態度を取るかだ」(2020年2月24日、方方(Fang Fang)『武漢日記』) (注4)

2, 自然と社会の関係の見直し- 札大講義における子ども、家族、子育ての変容の捉え直し

1) 人間社会への視点の見直し

コロナ禍のオンライン教育で、あらためて気づいたことも多かった。例えば、文化人類学的な野生動物と人間の比較は、この間の研究者のフィールドワークでわかったことも多い。(例えば、類人猿と人間の違いはわずか(山極寿一)) (注5)しかし、COVID-19の感染拡大は、ウイルスの宿主と人間の接触が生み出したものとされている。その場合、グローバル経済や人口の拡大が、人間社会と野生生物が棲み分けてきた境界領域を曖昧にし、相互越境の拡大が生み出したものともいえる。単に、観察の対象として見るだけでなく、人間と野生生物の関係を、今後、どう考えていくのかが問われてきたともいえる。

さらに、この問題は、アマゾンなどの熱帯雨林の消失、シベリアの永久凍土の縮小(人類にとって未知のウイルスの大量出現)、北極や南極等の氷山の縮小、各地の気温

の急上昇、豪州やアメリカでの森林火災の広がり等、人間社会の活動が気候変動をもたらし、海拔の低い土地に住む人々の生存の危機や野生生物の絶滅危惧種の増大など、深刻な事態が報告されてきている。(注6)

そうしてみると、教育学のテキストなどに、書き込まれてきた、地球上の、種の系統的発生、脳の発達などで、人類の優位性や優越性を単純に描いていいのか、人間は、地球上のあらゆる種の共生を語る資格があるのか、と思えてきたのである。

また、アドルフポルトマンの説く、ヒトの生理的早産は、他方で人間の発達の可能性と可塑性をもたらしたが(注7)、医学の発達による、新生児の死亡率の激減は、他方で未熟児の発達をどのように保障するのか、さらにその後の生をどうゆたかに保障するのかの新たなチャレンジを要請している。そのためには、きめの細かな乳幼児期の子どもの観察、科学的な協働の発達支援やケアのありようが求められている。だが、幼児保育の世界は、これに対応しているのか？まだまだ未開拓であると思われる。

あるいは、障害児の教育に先立って、歴史的には異常児や野生児研究がされたことがあった。これらも、近年の研究では、「狼に育てられた子」のエピソードや内実はフェイクであったことも知られてきた。しかし、近年まで幼児保育や心理学の世界で、これらが事実であるかのように教えられてきたことを知ったのも驚愕すべきことだった。(注8) 実践分野の「暗黙知」は、もう一回見直されるべきではないだろうか？

その意味で、この間進展してきた障害児研究の分野から学ぶべきことも多いと思われる。イタール、セガンなどの初期研究は、後に心理学と医学の学際研究を発展させ、教育学にも大きな影響を与えてきた。さらには、産育、子育ての習俗研究は、アナー学派や民俗学とも、結合して近代教育学が見落としてきた、民衆知の再発掘作業がなされてきた。また、大脳心理学などの知見の発達、発達は、発達のメカニズム研究の新境地を開いてきている。(注9)

2) 子どものとらえかえし

教育学を学ぶ学生が、初期段階で教えられる視点は、子どもは、大人とは違う独自の存在への気づき(「人は子どもというものを知らない。子どもについて間違った観念を持っている・・・」エミール)であった。

子ども時代の人の発達にとっての貴重な価値への注目は、日常的な経験世界でも知られたことだが、一般的には、成功例を通して知られる場合が多い。しかし、子どもの虐待、過酷な労働、貧困がもたらす歪み、戦争のもたらす社会的損失と罪については、膨大なケースの蓄積があるにも関わらず、あまりにも失われた記憶が多いことや、事実の記録も残されているものは多くない。まして、子どもの視点に立った、研究は、端緒についたばかりである。(注10)

しかも、「人新世」期の子どもたちは、それ以前と異なる、家族のありよう、地域社会のありよう、国家の統治機構の変貌、学校とその後の職業世界の変動にさらされている。いわば、それ以前の段階に通用していた、準拠枠が崩れてしまったのである。

(注11)

その社会変動の変数を考慮した、子どもの精神発達・成長・学びの解明（ピアジェによる子どもの再発見以降、ワロンや米国の研究も多いが）は、どこまで来ているのだろうか？児童心理学、教育学、医学、福祉、障害児科学などの発展による子ども理解の深まりは、変動期の実際の教育実践や子育てにどれほど貢献しているのだろうか？おそらく、このような粗い問は、その分野の専門家には、失礼であろう。専門分化された研究にとって、大きな問は、無意味とされてきたからである。しかし、誤解を怖れずに言えば、そのような見方で良いのだろうか。言い方を変えれば、専門分化された知見の豊かさに比して、総合化された知見は豊かになってきているのだろうか？

(注12)

3, コロナ禍で広がった大学（教育）におけるオンライン・リモート・IT化の捉え方

1) 大学における教育の方法は、今までは、次の課題を担った。

- ①普遍的な知の理解と人格の涵養（リベラル・アーツ）→教養人、自由人の形成
- ②自然や社会に対する専門的学知の形成（専門分野の学問の形成）→研究者の世代継承
- ③高度専門職業人・専門家の養成→学部教育から大学院の充実（専門職学位）

20世紀後半からの大学・高等教育人口の拡大は、21世紀になって更にそのスピードを増した。(21世紀初期、米国約4000大学、中国約1800大学、ロシア約1000大学、日本約780、全世界で約1万8000大学、大学生・院生2009年段階で、約1億7000万人、吉見俊哉『大学は何処へ』2021年)

その発展は、大学間の差別的再編を、含んで進んで来た。①研究型・威信型大学、②専門的な職業人養成+社会の基幹人材の育成、③大衆的大学の拡大（Fランク、限界大学を含む）（ほぼ通説的大学排名）である。

歴史発展を踏まえると、欧州を基準にすると、中世の第1世代の大学、リベラル・アーツを通じての自由なヨーロッパ人、19世紀から20世紀の第2世代の大学、哲学、人文学、専門分野の学を通じて自由な国民、現代は、第3世代の大学、「世界哲学や世界人文学、様々なリベラルアーツ的な知を通じて自由な地球人」を育てる責務をもつ。(吉見俊哉、前掲)

2) コロナパンデミックによる日本の大学の劣化の可視化

2020年5月段階で、オンライン型授業は、日本の大学の90%以上で実施。

しかし、その質は、対面型講義では潜在していた、授業の質の格差を露呈させた。

①オンライン授業の前提条件の落差（学生と大学双方）：送受信デバイス、通信環境、学習を支える支援の落差、②コンテンツの準備と操作の習熟度、③オンライン授業の方法の開発、革新、④学習の進め方の支援、双交通対話、IT講義の長所と短所の見極め、⑤評価の方法の未確立。この中で、日本は高学費、低高等教育予算、大学教員の劣等処遇、研究者養成の負のスパイラル構造などで、研究・教育力の際立った低下を示してきた。

これらをいかに打開するかが問われている。(未完)

***叙述には、札幌大学女子短期大学部こども学科研究紀要（2020年）の拙稿の一部を改編して用いた。

（1）例えば、以下の著作を参照されたい。（便宜をはかるために、外国の著者は、すべて翻訳があるものを用いたので、出版年は原著とずれて、日本語版の出版年をあてている。）

1) 歴史軸

加藤茂孝『続・人類と感染症の歴史』丸善出版、2018年、山本太郎『感染症と文明』岩波新書、2011年、福岡伸一『生物と無生物の間』講談社現代新書、2007年、本田宏『本当の医療崩壊はこれからやってくる』洋泉社、2015年

2) 現代的課題

新版山内一也『ウイルスと人間』岩波書店、2020年、岡田晴恵『どうする！？新型コロナ』岩波ブックレット、2020年、朝日新聞社編『コロナ後の世界を語る』朝日新書、2020年、早川真『ドキュメント武漢』平凡社新書、2020年、日本子どもを守る会編『子ども白書2020-コロナ子どもクライシス』かもがわ出版、2020年、『コロナ時代の大学』（『現代思想』2020年10月号、青土社）、鈴木敏正『「コロナ危機」を乗り越える将来社会論』筑波書房、2020年、教科研編『コロナ時代の教師の仕事』旬報社、2020年、『季刊教育法』第206号、「新型コロナウイルス感染症、新しい教育はどう進むか」エイデル研究所、2020。

（2）斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書、なお、（人新世 Anthropocene は、ノーベル化学賞受賞者のパウル・クルップフェンが名付けた言葉、人間の活動が地球の表面を覆い尽くした年代の意）、2020年、大野和基編『コロナ後の世界—世界の知性6人に緊急インタビュー』文春新書、2020年、農文協編『新型コロナ19氏の意見—われわれはどこにいてどこに向かうのか』農文協ブックレット、2020年、村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる』岩波新書、2020年、デビッド・ハーヴェイ『資本主義の終焉』作品社、2017年

（3）パオロ・ジョルダノー『コロナの時代の僕ら』早川書房、2020年、

（4）方方『武漢日記』河出書房新社、2020年、

（5）山極寿一『「サル化」する人間社会』集英社、2014年、リチャード・リーキー『ヒトはいつから人間になったのか』草思社、1996年

（6）デイビッド・ウォレス・ウェルズ『地球に住めなくなる日』NHK出版、2020年、斎藤幸平『大洪水の前に』堀之内出版、2019年、グレッタ&スヴァンテ・トーンベリ『グレッタたったひとりのストライキ』海と月社、2019年

（7）アドルフ・ポルトマン『人間はどこまで動物か』岩波新書、1961年

（8）例えば、藤永保『発達の心理学』岩波新書、1982年

（9）例えば、ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史』（上、下）河出書房新社、2016年、中嶋哲彦『国家と教育—愛と怒りの人格形成』青土社、2020年、『シリーズ子どもの貧困』松本伊知朗編集代表 全5巻 明石書店、2019-20年、

（10）ジョック・ヤング『後期近代の目眩』青土社、2008年、ウルヒリッヒ・ベック『<私>だけ

の神』岩波書店、2011年、ジグムント・バウマン『リキッド・モダニティ』大月書店、2001年、本田由紀『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版、2005年、

(11) 例えば、田中孝彦『子ども理解—臨床教育学の試み』岩波書店、2009年、村知稔三、佐藤哲也、鈴木明日見、伊藤敬佑編『子ども観のグローバル・ヒストリー』原書房、2018年、ガート・ビースタ『民主主義を学習する』勁草書房、2014年、ガート・ビースタ『よい教育とは何か』白澤社、2016年、熊谷晋一郎『当事者研究』岩波書店、2020年、池上惇『学習社会の創造』京都大学出版会、2020年、鈴木敏正・姉崎洋一編『持続可能な包摂型社会への生涯学習』大月書店、2011年、姉崎洋一「共同学習・生活史学習の教育学的再検討」『共同学習・生活史学習の教育学的検討—歴史・比較・実証研究』（研究代表者 姉崎洋一）平成26年度—29年度、科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、2018年、教育科学研究会編『戦後日本の教育と教育学』かもがわ出版、2014年、岩波講座 教育変革の展望1 佐藤学、秋田喜代美、志水宏吉、小玉重夫、北村友人編『教育学の再定義』岩波書店、2016年、大田堯『大田堯 自選集成』全4巻・補巻、藤原書店、2017年、大田堯・中村桂子『百歳の遺言—いのちから「教育」を考える』藤原書店、2018年、中野光『梅根悟 その生涯と仕事』新評論、2019年、佐藤一子『地域学習の創造』東京大学出版会、2015年、上間陽子『裸足で逃げる』太田出版、2017年、佐藤広美『災禍に向き合う教育』新日本出版社、2019年、東畑開人『居るのはつらいよ』医学書院、2019年、

(12) 例えば、川口幸宏『知的障害教育の開拓者セガン』新日本出版社、2010年、清水寛『セガン 知的障害教育・福祉の源流 研究と大学教育の実践』全4巻 日本図書センター、2004年、中村隆一・渡部昭男編『人間発達研究の創出と展開』群青社、2016年、ガート・ビースタ『よい教育とは何か』白澤社、2016年、二井仁美『留岡幸助と家庭学校』不二出版、2020年